



TITLE:

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

小見山, 章

CITATION:

小見山, 章. 志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性 (Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1981, 10: 42-43

ISSUE DATE:

1981-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162936>

RIGHT:

心理的な結びつきも、メスがリーダーシップをとったことに大きく関係しているものと思われる。

なお、この群れは1979年初頭にほぼ全個体が捕獲され、それ以降の調査は不可能となってしまった。

木曽山系に連続分布をするニホンザルの群れのグルーピング・パターンに関する比較研究

田中 進(マカク研)

村松正敏(マカク研)

木曽川左岸の上松町・大桑村一帯には、5つの野生群が生息している。それは、木曽川支流の滑川左岸の風越山北斜面に生息している群れ(K_e群)、東野地区周辺に生息している群れ(T群)、倉本周辺に生息している群れ(K群)、上郷周辺に生息している群れ(S群)及び倉本周辺に生息している個体数の小さい群れ(K_s群)である。

このうち、1979年11月のK群の個体数及び性年齢構成は、0歳個体が16頭、1歳から3歳個体が7頭、4歳以上のメスが27頭、4歳から7歳のオスが2頭、8歳以上のオスが10頭、性年齢不明個体が26頭の合計88頭であった。4歳以上のメスに対する0歳個体の割合は、59.3%、群れの総個体数に対する0歳個体の割合は、18.2%であった。これらの値はニホンザルの群れの大きさと構成についての記録によると、箕面B群(1955年センサス)及び小豆島S群(1956年8月センサス)の値とよく似ている。また、59.3%、18.2%という値はニホンザルの野生群の中ではやや高いように思われる(増井、1976)。

また、出産・死亡については若干の資料が得られたので、次年度の報告で述べたい。

遊び行動の集団間比較研究

— 勝山集団と淡路島集団について —

小山高正(阪大・人科)

小山幸子(〃・〃)

中道正之(〃・〃)

餌付け野生ニホンザル8集団の比較研究から、淡路島集団では個体関係が極めて親和的であるのに対し、勝山集団では順位関係が厳しいという相対する結果が得られた。この集団間差異は発達

段階の比較的初期から形成されていくものと考えられる。淡路島・勝山の両集団で幼体期の遊び行動および初期の母子関係に注目し当該集団の特性が個体発達の初期にどのように反映されているかを検討した。

観察は1979年6月から12月に両集団で0歳から4歳を対象として行われた。まず餌場を巡回し遊び仲間を記録し、遊び仲間がどのように形成されているかを分析した。淡路島・勝山とも、雌よりも雄が、年齢別では、1・2歳の個体が遊ぶ度合いが高いという同じ結果が得られたが、遊びに参加した2個体の年齢差からみると、勝山では年齢差が広がると遊びが著しく減少するのに対し、淡路島では年齢差が2歳ぐらいまで遊び仲間をよく形成する点に差異が認められた。

8mmフィルムに基づく遊びの行動要素の分析は、現在進行中であるが、勝山では優位と劣位のサルの間でいくつかの行動的差異が見られたのに対し、淡路島ではその差は明確でなく両集団の特性が反映しているものと考えられる。

生後直後から約3ヶ月までの幼体をハンセン法で追跡観察した。その結果、母子間距離は加齢に従い淡路島のほうが大きくなり母ザルから離れて広範に動くのに対し、勝山は相対的に母ザルに近接して活動する傾向が高く、さらに淡路島では幼体は成体との接触が比較的多くなり、逆に勝山では未成体との接触が多いという諸点の著しい集団差が抽出された。

両集団の相異なる集団特性は発達のかかなり初期に各個体に獲得され、遊び行動を含めた幼体の行動に反映されていることが明らかとなった。

設定課題 2

各環境構造における霊長類の適応機序の解明

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性

小見山 章(岐大・農)

I はじめに

志賀高原横湯川上流域では様々な植生型がモザイク状に分布している。今回は湖成層を含み地形が多様な本調査地において、地形と植生型の分布

の関係および各植生型における落葉・落果量について調べた。

II 調査地と調査方法

調査地は志賀高原西館山北斜面からクロフノ沢・横湯川本流・竜王沢で囲まれた金倉林道下の地域である。標高は1050mから1650mの範囲にあり、現在も地すべりが頻発し緩斜地と急斜地、尾根と沢が連続するところである。調査地を踏査し林冠の種組成を相観でもとめて植生型の分布を決定した。1×1mの方形リタートラップをブナ林に23個、ミズナラ林に13個、湿性林に24個設置して落葉・落果量を測定した。

III 調査結果および考察

調査総面積(406 ha)中、ブナ林(131 ha)、ミズナラおよびカンバ林(214 ha)、ヤマハンノキ林(45 ha)、その他(16 ha)の植生型がみられた。ブナ林は標高1250m以上の尾根地形で傾斜が急な斜面に分布している。ブナは小径のものが多く、カンバ林は標高1500mを境に上部ではダケカンバが、下部ではシラカンバの混交歩合が大きい。シラカンバ林は地すべりに由来するテラス状の緩斜地を占めている。ミズナラ林も緩斜地に分布するが、斜面下部に多くみられる。カンバ林、ミズナラ林ともに一斉林的な林分構造をもつ。ヤマハンノキ林は斜面下部の沢近くの湿性な場所に分布していた。湿性な場所をトチノキ、サワグルミ、ミズキ、ヤナギ類が占める場所もある。当地の植生型のほとんどは林分構造と樹種組成から二次林とみなされる。地形の多様さと森林利用の結果、植性のモザイク的構造が形成されたものと考えられる。

1980年8月から11月に至る期間での通称水道二又のブナ林の落葉量(乾重)は1800kg/ha、落果量(殻斗等を含む)は30kg/haであった。同期間のミズナラ林(地獄谷右岸)の落葉量は2100kg/ha、落果量は70kg/haであった。通称オカメノ平にあるミズキが優占する湿性林の落葉量は1900kg/haから3000kg/ha、落果量は20kg/haから190kg/haであった。いずれの林でも落葉落果量のピークは10月にあった。また今年度の落下量はいずれの林の場合も前年度の落果量の $\frac{1}{5}$ に満たないことや観察の結果からみて、今年度は調査地における結実量が比較的少ない年度であったと考えられる。

房総半島におけるニホンザルの分布現状とその構造

岩野 泰三(東大・理)
(財)日本野生生物研究センター

筆者は房総半島におけるニホンザルの分布の現状を把握し、群れの分布域とハナレザルの出現域の空間的構造、群れの分布域の時間的变化およびその地域の環境上の特徴を明らかにすることを目的として、1978、79、80年にわたって調査を行った。

調査地域は、房総半島中、南部の7市10カ町村およそ1294km²であり、聞きとり地点は195地点(群れ分布情報69地点、ハナレザル出現情報81地点)である。調査は、主として従来から確認されていた群れの分布域の外縁に沿って行われた。新たに確認された群れの分布地点は35地点、このうち明らかに分布域の外縁が拡大した地点は15地点である。拡大した距離は、最近7年間に最大4km、平均2.1km(0.3km/年)である。

ハナレザルの出現情報の79.1%が群れ分布域から15km以内で得られた(ハナレザルが群れ生息域から最も遠い地点で見られたのは千倉町で、距離は23.2kmである)。

調査地域を基準地域メッシュ(0.9km²)に分割し、群れ分布域の環境上の特徴を解析し、以下の結果を得た。

群れ分布域は284区画約255.6km²である。この地域の道路密度は1区画あたり0.41であり、他地域の半分以下の値である。また、この地域では、市街地や耕作地の割合が他地域に比較して低く(市街地3.17%、耕作地52.82%)、自然および代償植生は他地域に比較して高い(94.01%)。

ヤクザル地域個体群における分裂群の遊動域の形成機序とその要因の分析

丸橋 珠樹(京大・霊長研)
山極 寿一(京大・理)

筆者らは、屋久島国割岳西斜面において、照葉樹林を生息環境とする野生ニホンザルの自然社会の研究を、1975年以来、継続しておこなってきた。1976年に、丸橋によって餌を媒介とせず habituation されたK₀群は、1976年の交尾期から1978年